

部室にて

猿橋 勇人

キャスト

ナカモリ
セリザワ
幽霊部員

舞台はとある高校の演劇部の部室。
制服姿の男が原稿用紙に何かを書いている。手を止め、客席へ向かい：

幽霊部員

見えないものを見ようとすること、見えるものを見ないようにすること、どちらが難しいのだろうか。見えないものを見ようとして私は必死に目を凝らしたけれど、やっぱり何も見えなくて、いつも私の目の前には見たくもないものだけが見える。見ないようにすればするほど、その存在は大きくなる。見えないからといって、存在していないとは言い切れない。見えるからといって、存在しているとも、言い切れない。

幽霊部員、再び原稿用紙に向かう。
ナカモリが入ってくる。

ナカモリ

お疲れー、あれ、まだセリザワちゃん来てないんだ。まあ、そのうち来るか。

ナカモリ、本棚にある一冊の脚本を手に取り、読む。

ナカモリ

見えないものを見ようとすること、見えるものを見ないようにすること、どちらが難しいのだろうか。見えないものを見ようとして私は必死に目を凝らしたけれど、

幽霊部員

やっぱり何も見えなくて、いつも私の目の前には見たくもないものだけが見える。見えないようにすればするほど、その存在は大きくなる。見えないからといって、存在していないとは言いきれない。見えるからといって、存在しているとも、言い切れない：よくやつたよなあ、こんなの。

幽霊部員、手を止め：

見えないものを見ようとすることに何の価値があるのか。価値なんてないのかもしれない。見えるものを見ないようにすることに何の意味があるのか。意味なんてないのかもしれない。理由は、あるのかもしれない。見えないものは存在していないと言いつつ、まだ持っていない。持とうともしていかないけれど。

幽霊部員、原稿用紙へ。
セリザワが入ってくる。

セリザワ

ナカモリ

セリザワ

ナカモリ

セリザワ

ナカモリ

セリザワ

ナカモリ

お疲れ様です。
あ、お疲れー。今日遅かったね。
すみません。ちよつと先生に呼び出されてしまつて。
何かしたの？
いや、そういうのではないんですけど、この前のテストでガクッと点数落とすしちゃつて、何かあったのかつて心配されて、まあ、別に何もありませんけどね。
そうだったんだ。
テストの点数落としただけで心配されるのつて、なんか変ですよ。「いつものお前ならもつと点数取れるはずなのにどうしたんだ、何かあったのか」つて、「いつもの

ナカモリ

私「って何だって話ですよね。私でも分からないのに。まあ、それくらい気にかけてくれてるってことなんじゃないの？ いいことだよ、多分。

セリザワ

そうなんですかね。

ナカモリ

それよりも、練習しよ。大会近いし。

セリザワ

そうですね。もう来週ですもんね、地区大会。

ナカモリ

今年こそは地区大会出たいんだよね。ほら、うちの学校って運動部が強いからさ、文化部になかなか人集まってこないんだよね。その中でも演劇部って特に集まらなくて。

セリザワ

新入部員、私だけですもんね、今年。

ナカモリ

まあなんとかが私が1年のときは出られたけど、去年はいろいろあって部員私だけになっちゃって出られなかったし。

セリザワ

：いろいろあったって、何かあったんですか？

ナカモリ

いろいろあったのよ、いろいろ。で、今さらだけど、どんな形でもいいから出ておけばよかったなって後悔してて、それで今年セリザワちゃんが入ってくれて、今年こそはって：ごめんね。これは私の気持ち。

セリザワ

なんか、うまく言えないですけど、私は、先輩の気持ちに乗っかってみたいと思います。どんな感じになるか分からないですけど、とりあえず。それが今の私の気持ちです。

ナカモリ

ありがとうございます。じゃあ、一緒にがんばろ。

セリザワ

はい。

ナカモリ

ナカモリ、セリザワ、準備体操。

幽霊部員、手を止め：

幽霊部員、手を止め：

幽霊部員

見たいと願う景色は、願えば願うほど遠ざかって、やがて見えなくなる。見たくないと願う景色は、願えば願うほど近づいてきて、いつの間にか私の隣で口笛を吹いている。私は耳をふさいだけれど、その音が消えることはなく、逆にその音はどんどん大きくなって、ズンズンと重低音を響かせて私の鼓膜を襲ってくる。そしてやがて気づく。その音は、私の中から響いていたのだと。

幽霊部員、再び原稿用紙へ。
準備体操は続いている。

セリザワ

今日どうします？またシーンごとに練習しますか？
どうしようかな。まあそれもいいけど、今日は一回通してやってみない？最近やっ
てないし。

セリザワ

分かりました。じゃあ、小道具とかも全部セットしますか？
そうだね。そのほうがいいかな。

セリザワ

せっかくならウリノ先生にも見てもらいたいですね。呼んできますか？
今日いいよ。出張だつて、トウキョウに。

セリザワ

トウキョウですか？
ウリノ先生って放送部の顧問もやってるんだよね。
へー。

セリザワ

私と同じクラスにウメハラ君っているんだけど、ウメハラ君放送部に入つて、今
年アナウンス部門で全国大会行くことになつて。
：放送部って全国大会あるんですか？

ナカモリ

けっこう大規模にやってるんだつて。ウリノ先生、ウメハラ君の引率でエネチケー
ホールに行つてるはずだよ。「コーハク歌合戦で使われてるホールに行けるのよ」つ
てはしゃいでたもん。ウリノ先生のある笑顔見たことないよ。

セリザワ 私たちのことはほったらかしなんです。私
 ナカモリ でもウリノ先生言ってたよ。「トウキョウバナナ買ってくるから」って。
 セリザワ :じゃあ、大丈夫です。
 ナカモリ あ、それでいいんだ。
 セリザワ で、先輩。
 ナカモリ 何？
 セリザワ 演劇部にも全国大会ってあるんですか？
 ナカモリ 私も演劇部入って初めて知ったんですけど、あるみたい、全国大会。
 セリザワ 全国大会ってどういう劇やるんですかね。
 ナカモリ テレビでやってるよ。まあ、年に一回だけだし、全部の上演観られるわけじゃない
 セリザワ けどね。
 ナカモリ そうなんです。多分、火薬とかいっぱい使うんでしょうね。
 セリザワ 火薬：火薬？
 ナカモリ なんか、爆破シーンとかありそうじゃないですか。ドカーンって。
 セリザワ それはないよ。舞台の上で爆破は絶対ダメでしょ。
 ナカモリ え？ダメなんです？残念なあ。
 セリザワ いかやろうと思ってたの？
 ナカモリ なんか、迫力あるかなって。
 セリザワ まあ、迫力はあるけど、そのあと舞台使えないだろうね。「次の上演まで2ヶ月お待ち
 ナカモリ ちください」みたい。
 セリザワ 「そのままおかけになってお待ちください」みたい。
 ナカモリ そのままはつらいね。
 セリザワ でもすごいんでしょね、全国って。もしかしたら舞台全然使わないうで客席だけ使
 ナカモリ っで一時間演じちゃうとか、そういうのもあるんでしょうね。
 ナカモリ あ、そういうのはあるかもね、もしかしたら。

セリザワ 行ってみたいな。
ナカモリ そうだね。
セリザワ エネチケ―ホール。
ナカモリ あ、そっち？
セリザワ 先輩、そろそろ机とか動かしますか？
ナカモリ あ、そうだね。じゃあ、動かそうか？
セリザワ はい。

ナカモリ、セリザワによって机、小道具がセッティングされていく。
幽霊部員、自身が使っていた机が動かされる前に移動を始め、舞台脇に片付けられた机に向かいながら：
見たいと願った景色が見えたとき、私は幸せになれるのだろうか。見たくないと願った景色が見えなくなったとき、私は幸せになれるのだろうか。そもそも、私は何が見たかったのか、何を見たくなかったのか、それすら、ときどき分からない。私は、何がばんの中も、机の中も、探してはみたけれど、やっぱりみつからない。私は、何が見たかったのだろう。私は、いつからここにいるのだろうか。

準備完了。
幽霊部員、舞台脇に動かされた机へ。

ナカモリ 小道具も置き忘れないよね。
セリザワ 大丈夫です。
ナカモリ じゃあ、とりあえず通してみますか。

セリザワ はい。なんか、よく分からないんですけど、いつもと違う感じがします。

ナカモリ 違うって何が？

セリザワ いつもの部室じゃないというか、なんか、大きな舞台に立ってる感じがします。すみません、変なこと言っちゃって。

ナカモリ 実は、私もそんな感じしてた。

セリザワ 先輩もですか？

ナカモリ うん。何でだろ、まあ、大会近いってこともあるのかな。

セリザワ もしかしたらそうかもしれないね。

ナカモリ なんか緊張してきちゃったな。

セリザワ 仕方ないですよ。大会近いですから。

ナカモリ そうだよ。じゃあ、やりますか。

セリザワ はい。

ナカモリ・セリザワ、それぞれ舞台袖へ。

幽霊部員

これからしばらく世界が変わる。私はただ、変わった世界を見守ることしかできない。

暗転。ブザー音。アナウンスが流れる。

アナウンス 上演ゼロ、〇〇県立〇〇高等学校、〇〇〇〇作、アパ－トさがしを、上演いたします。

アパ－トさがし

キャスト 不動産屋

客

※配役は指定しない。どちらがどちらを演じてもよい。

舞台、不動産屋。
客が入ってくる。

不動産屋

「あ、いらっしやいませ。今日はどのような高層ビルをお探しで」

客

「あ、いや、あの、ビル探してないです」

不動産屋

「あ、そうでしたか。てっきり高層ビルをお探しの方かと」

客

「何でそうなるんですか」

不動産屋

「だって、セレブリテイの方ですよね」

客

「いや、そんな風には見えなと思いますけど」

不動産屋

「そんな風に見せないのが最近のセレブリテイなんですよ。困るんですよ、そ

ういうの」

客

「あの、私、アパートを探しに来たんですけども」

不動産屋

「あ、そうなんですか？これはこれは失礼しました。どうぞこちらへおかけにな

ってお待ちください」

客

「はい」

客、イスへ座る。

不動産屋、奥からお茶を用意して、客へ。

不動産屋

「つまらないお茶ですけど」

客

「あ、ありがとうございます」

不動産屋 客 不動産屋

「まあ、面白いお茶って何だって話ですけどね」
「……」
「で、どのような物件をお探しで」
「あ、そうですね、あの」
「ご予算は」
「え？あ、あの、そうですね」
「間取りは」
「ええ？あ、あの、ですね」
「駅はよくご利用されますか」
「あ、あの」
「近所付き合いは」
「すみません」
「……はい？」
「ちよつと早いです」
「……早い？」
「今のところ私どの質問にも答えられてないです」
「あれ？答えてませんでしたっけ？」
「答えてませんよ」
「なんか、見晴らしのよい48階建てのビルがなんとかって」
「言ってますせんよ。私高層ビル探してないです」
「ほとんどですか？やっぱりあなたセレブリティじゃ」
「ないです」
「年収8億の方ですよね？」
「全然違いますよ。どこから出てきたんですかその金額」
「いやいや、失礼しました」

客 不動産屋 「あと、近所付き合いはって聞かれた気がするんですけど」
 客 不動産屋 「え？私そんなすつとんきょうなこと言いましたっけ」
 客 不動産屋 「あれ？言ってますんでしたっけ」
 客 不動産屋 「そんなこと聞く人がいたら、何回か会ってみたいですよ」
 客 不動産屋 「まあ何回も会う必要はないと思いますけど」
 客 不動産屋 「じゃあ改めてお伺いしますね。近所付き合いは」
 客 不動産屋 「やっぱり言ってるじゃないですか」
 客 不動産屋 「いや、大切ですからこれ」
 客 不動産屋 「すつとんきょうなことって言ったじゃないですか」
 客 不動産屋 「あなたよく分からない人ですね」
 客 不動産屋 「私のセリフですよ」
 客 不動産屋 「今日は開店早々ミステリアスだ」
 客 不動産屋 「はい？」
 客 不動産屋 「ミステリアスから始まる一日ってあるんですね、人生には」
 客 不動産屋 「何を言ってるんですか」
 客 不動産屋 「でも嫌いじゃないんですよね、こういう展開」
 客 不動産屋 「何一人で感動してるんですか」
 客 不動産屋 「よし決めました」
 客 不動産屋 「はい？」
 客 不動産屋 「今日は特別に、ミステリアスのかけらもない軟弱なお客様には絶対出さない、
 私おすすめの超優良物件、ご紹介させていただきます」
 客 不動産屋 「ありがとうって言っているんだらうか」
 客 不動産屋 「覚悟してくださいよ」
 客 不動産屋 「ミステリアスな展開だ」
 客 不動産屋 「で、ご予算は」

客 「あ、えーと、高くても5万円くらいですね」

不動産屋 「希望の間取りなんかはありますか」

客 「まあ、特にはないです」

不動産屋 「駅はよく利用されますか」

客 「あ、よく使うのでなるべく駅に近いほうがいいですね」

不動産屋 「なるほど。じゃあ、そういった希望は一切無視しますね」

客 「じゃあ聞かないでくださいよ」

不動産屋 「ちよつと待っててくださいね。今資料持ってきますから」

不動産屋、資料を取りに行く。

不動産屋、資料とお茶を持ってくる。

客 「お待たせしました。私も喉渴いたんでお茶いただきますね」

「あ、どうぞ」

不動産屋、お茶を飲む。

不動産屋 「このお茶超面白いなあ」

「え？」

「超うける」

「そうなの？」

客、お茶を飲む。

客 「全然面白くない」

不動産屋
客 「まずはこんな物件どうでしょうか」
「あ、はい」

不動産屋、資料を見せる。

不動産屋 「まあ何の変哲も無い3LDKYNなんですけども」
客 「まあYNの時点で私は変哲を感じてますけど」
不動産屋 「いや、でも家賃のほうが格安なんですよ」
客 「いくらですか？」
不動産屋 「なんと9800円」
客 「え？かなり安いですね」
不動産屋 「このあたりじゃ考えられない家賃ですよ。屋根が無いだけでこんなに安いアパートに住めるんですから……」
客 「：屋根が、無い？」
「はい」
客 「：え？無いんですか？屋根」
不動産屋 「まあ、あるか無いかで言えば、無いですよ」
客 「いや、無いですよって」
不動産屋 「でもそれだけでなんと9800円」
客 「じゃあYNっていうのは」
不動産屋 「あ、屋根なしの略です」
客 「いや、ダメだと思えますけど」
不動産屋 「そうですかね」
客 「じゃあ、雨とか」

不動産屋 「もうバンバン入ってきますよね。プライベートとか一切関係ないですから、雨

は」

客 「それダメですよね」

不動産屋 「ダメですかね。なんかこう、自然と共にみたいな？ネイチャーな感じがいいな
って」

客 「いや、私住むところににそういうの求めてないんで」

不動産屋 「あ、じゃあダメですね。もしかしたらお客様アレですか？雨にぬれるとパニッ

ク起こして猫に変身しちゃうとかそういうタイプの方ですか？」

客 「そういうタイプではないです」

不動産屋 「じゃあいいと思うんだけどなあ」

不動産屋、お茶を飲む。

不動産屋

「超うける」

客 「え？」

客、お茶を飲む。

客 「何がうけるんだろ」

不動産屋 「じゃあ、この物件どうですかね」

不動産屋、資料を見せる。

客 「え？あ、はい」

不動産屋 「まあ、何の変哲もない3LDK6Sなんですけど」

客 不動産屋 「：3人でよくないですか？」

客 不動産屋 「いや、それぞれ料理スタイルが全然違うんですよ」

客 不動産屋 「はあ」

客 不動産屋 「たとえば、洋食専門のシェフで吉岡さんと山口さんがいるんですけど、吉岡さんは普通のナポリタンを作るタイプですし、山口さんはナポリタンにちよつとオリジナルテイを加えて、ナポリタン・地中海の香りを添えてみたいな感じの料理を作るんですよ」

客 不動産屋 「あ、注文するときちよつと恥ずかしくなるやつですね」

客 不動産屋 「まあそういうのが好きな人もいますから。だからこそ6人いるんですよ」

客 不動産屋 「そんなんですか」

客 不動産屋 「だからまあ、飽きることは無いと思いますよ」

客 不動産屋 「確かにちよつとしたパーテイにも対応できそうですね」

客 不動産屋 「ちよつといい感じですよ」

客 不動産屋 「いや、だいたいいいと思います」

客 不動産屋 「いいですよ。6人のシェフと一つ屋根の下寝食を共にして生活するっていうのはやっぱり」

客 不動産屋 「え？あ、え、今何て言いました？え？寝食を共にするんですか？」

客 不動産屋 「はい」

客 不動産屋 「いや、はいって：え？シェフは食事のときにだけ来るとかそういうのじゃないんですか」

客 不動産屋 「いやいや、それはもう、仲間意識でワイワイやってもらいたいなど」

客 不動産屋 「いや、それはできませんよ」

客 不動産屋 「絶対楽しいと思いますけど。6人のおじさんと一緒に生活を：」

客 不動産屋 「おじさん？いや、おじさんじゃなくても厳しいですよ」

客 不動産屋 「8ヶ月ぐらいしたらだいぶ慣れてきますから」

客 不動産屋 「慣れるまでけっこうかかりますね：ってそういう問題じゃないですよ」
 客 不動産屋 「寝るときはみんなで川の字になって：あ、川の字が2つできますね。すごい」
 客 不動産屋 「何がすごいんですか」
 客 不動産屋 「あ、7人になるから一人余るか」
 客 不動産屋 「そんな発見いららないですよ」
 客 不動産屋 「ダメですか？」
 客 不動産屋 「もちろんダメですよ。あ、あと一つ気になったんですけど」
 客 不動産屋 「何ですか？」
 客 不動産屋 「シェフって頭文字SじゃなくてCですよね」
 客 不動産屋 「：：：まあ、何の変哲も無い3LD3K6Cなんですけど、キッチンが3つありまして、ちよつとしたパーティにも：」
 客 不動産屋 「なに最初からやり直そうとしてるんですか」
 客 不動産屋 「お客様、シェフの頭文字ってSじゃなくてCなんですよ」
 客 不動産屋 「それ私言ったやつですよ」
 客 不動産屋 「ダメですか」
 客 不動産屋 「ダメに決まっていますよ」
 客 不動産屋 「お客様もわがままですねえ」
 客 不動産屋 「全然わがままじゃありませんよ」
 客 不動産屋 「じゃあどれ紹介しようかなあ」
 不動産屋、お茶を飲む。
 客 不動産屋 「さっきよりはうけないなあ」
 客 不動産屋 「え？」
 不動産屋 「ややうけって感じ」

客、お茶を飲む。

客 「違いが分からない」
不動産屋 「(資料を見せながら) じゃあこの物件どうですか? 何の変哲も無い 1000L

客 DKです」
不動産屋 「1000? リビング多すぎますよね」

客 「違いますよ。ダイニングとキッチンが少なすぎるんです」
不動産屋 「どっちでもいいですよ」

客 「いいんですか? ではこちらにサインを」
不動産屋 「そういう意味じゃないです」

客 「ダメですか」
不動産屋 「ダメです」
「(資料を見せながら) じゃあこの物件はどうですか? 何の変哲も無い 3LDK

客 YNなんですけど…」
不動産屋 「また屋根無しじゃないですか」

客 「違いますよ。床が無いんです」
不動産屋 「床が無い? どういう状態ですか」

客 「土です」
不動産屋 「ダメです」

客 「木目調の土です」
不動産屋 「ダメです」

客 「美しい土です」
不動産屋 「だからダメですって」

客 「お客様はなんてわがままな人なんだ！」
不動産屋 「

客 不動産屋 「確かにちよつと遠いですね」

客 不動産屋 「でもまあ、このあたりはサナチエフが通つてますからそれを使えば5分で行けま

客 不動産屋 すので特に問題は」

客 不動産屋 「はい？」

客 不動産屋 「：はい？」

客 不動産屋 「サ、サナチエフ？」

客 不動産屋 「そうですね。このあたりは市営のサナチエフが通つてますので」

客 不動産屋 「え？あの」

客 不動産屋 「：何か？」

客 不動産屋 「サナチエフってなんですか？」

客 不動産屋 「いや、サナチエフですよ」

客 不動産屋 「いや、それが分からないんですよ」

客 不動産屋 「え？普段使いませんか？サナチエフ。私いつも使つてますよ」

客 不動産屋 「サナチエフって言葉自体を聞いたこと無いです」

客 不動産屋 「そうなんですか？もしかしてお客さん帰国子女ですか？」

客 不動産屋 「違います」

客 不動産屋 「便利です。サナチエフ。このあたりだと10分間隔で市営のサナチエフが通り

客 不動産屋 ますから」

客 不動産屋 「：バスみたいなものですか？」

客 不動産屋 「：バスはバスですよ。サナチエフはサナチエフですよ」

客 不動産屋 「だからその、サナチエフって何なんですか」

客 不動産屋 「いや、説明するまでも無いでしょ」

客 不動産屋 「え？ここでは普通に使われてるんですか？その、サナチエフ」

客 不動産屋 「そうですね。最近はノンステップサナチエフも出てきましたから」

客 不動産屋 「ノンステップサナチエフ？」

不動産屋 「今の時代はバリアフリーですから」
 客 「まあ、そうですね」
 不動産屋 「しかも来年からはハイブリッドサナチエフまで出てくるんですよ」
 客 「ハイブリッドサナチエフ？」
 不動産屋 「これからの時代は環境のことも考えなきゃいけないですからね」
 客 「…そうですね」
 不動産屋 「あ、何年か前になるんですけど、シュガーレスサナチエフっていうのが一時期出
 客 たんですよ」
 不動産屋 「シュガーレスサナチエフ？」
 客 「まあ文字通りシュガーを一切使わないサナチエフだったんですよ」
 客 「…普通のサナチエフは砂糖使いますか？」
 不動産屋 「たくさん使いますよ。だから夏になると全体的にべたついてくるんですよ」
 客 「はあ」
 不動産屋 「それが不評でシュガーレスのサナチエフが出たんですよ、でもやっぱり砂糖じ
 客 やないとうまく性能を発揮できないんですよ。サナチエフ機嫌悪くなりますし」
 客 「…え？サナチエフって生き物なんですか？」
 不動産屋 「いや、生き物って感じでもないですねえ。もう、ジャンルとかカテゴリーとか、
 客 そういうのには一切あてはまらない存在ですよサナチエフは」
 客 「あの、全然イメージがわからないです」
 不動産屋 「一人ひとりの心に、それぞれのサナチエフがいるんですよ」
 客 「まあ、私にはいいんですけど」
 不動産屋 「だからまあ、駅から遠い物件ですけど、全然問題はないですよ」
 客 「あの、そのサナチエフって私も使えるんですか？」
 不動産屋 「大丈夫ですよ。まあ使う前には市役所で申請しないとイケないですけどね」
 客 「申請が必要なんですか」

不動産屋 「そうなんですよ。市役所で職員の人からサナチエフフアナライザーを受け取らないと使えないんですよ」

客 「サナチエフフアナライザー？」

不動産屋 「はい。それを身にまとわないと、サナチエフが止まってくれないんですよ」

客 「身にまとうって、服なんですか？」

不動産屋 「服ではないですね。：：：フアナライザーです」

客 「そのフアナライザーが分からないです」

不動産屋 「まあ簡単に言うと：：：雰囲気です」

客 「雰囲気？」

不動産屋 「はい。市役所で申請すると、その、サナチエフを使いたいっていう雰囲気を身にまとえるんですよ」

客 「それは申請しないと身にまとえないんですか？」

不動産屋 「まとえないですよ。しかも申請しないで使うのは条例で禁止されてますから。違反すると次の日絶対お腹痛くなりますよ」

客 「あ、罰金とかじゃないんですね」

不動産屋 「でも辛いですよ。絶対痛くなるんですから」

客 「絶対痛くなるのはイヤだなあ」

不動産屋 「そうですね。まあそうならないためにも早めに市役所に行って申請することをおすすめします」

客 「分かりました。あ、ちなみに市役所ってどこにあるんですか？」

不動産屋 「ここからだ徒歩1時間はかかりますね」

客 「遠いですね」

不動産屋 「でもまあ、無料のトカポフを使えば10分で着きますから：」

客 「あの、トカポフって何ですか？」

不動産屋 「知りませんか？まあ正確に言うのとトカポフとイリオモテトカポフがあるんですけど

客 「あの、もういいです」
不動産屋 「はい？」
客 「普通の間取りで、あと、バスとか電車とか、普通の交通手段を使える所がいいです、私。お願いします、そういう普通の所、紹介してもらえませんか？」
不動産屋 「：残念ですね：分かりました。その前にちよつとお茶飲んでいいですか？」
客 「どうぞ」

不動産屋、お茶を飲む。

不動産屋 「うまい」
客 「え？」
不動産屋 「：どうかしました？」
客 「いや、何でもありません」
不動産屋 「（資料を見せながら）ではこちらの物件はどうですか？普通の3LDKです」
客 「はい」
不動産屋 「このアパートも築5年ですし、何よりも、最寄駅から徒歩5分」
客 「すごくいいじゃないですか。家賃は」
不動産屋 「8億円です」
客 「またまた、ご冗談を」
不動産屋 「いえ、冗談じゃありません、8億円です」
客 「いやいや、ありえないじゃないですか」
不動産屋 「はい、ありえませんが普通は。でも、8億円です」
客 「8億円なんて無理ですよ」
不動産屋 「そうですか、じゃあこの物件はなかったことに」

客 「他にないんですか」
不動産屋 「ありません」
客 「はい？」
不動産屋 「これしかありません。でも、8億円払えないお客様は住むことができません」
客 「何を言ってるんですか。他に紹介してくださいよ」
不動産屋 「もう一度申し上げます。ありません」
客 「ふざけてるんですか、私帰ります」
不動産屋 「帰る場所もあります」
客 「は？」

客、帰ろうとして、扉を開ける仕草。

客 「え？道がない、いや、何もない」
不動産屋 「お客様の帰る場所は、そこらにはありません」
客 「ちよつと何なのよ。訳わかんない」
不動産屋 「分かります、その気持ち」
客 「何なのよ、ここ」
不動産屋 「うまく説明できません」
客 「しなさいよ。説明するのも仕事でしょ」
不動産屋 「：道の途中です」
客 「説明になつてない。道の途中って、意味わかんない」
不動産屋 「私としてはうまく説明できたと思つていきます」
客 「全然できてない。道の途中って、どこに行く途中なのよ」
不動産屋 「まだ誰も見たことのない世界です。少なくとも生きている人間は誰も」
客 「生きている人間？」

不動産屋 「：もう回りくどい話はやめにします、ざっくり言います。あなた死にました」
 客 「え？」
 不動産屋 「信じられませんよね」
 客 「信じられないもなにも、死んだ覚えはないし」
 不動産屋 「そうですね。生きている人間で死んだことのある人間はいません、多分」
 客 「どんだん訳分かんなくなってきた」
 不動産屋 「それが普通です。むしろ、理解されたらそれはそれでちよつと悔しいです」
 客 「それは単純に意味が分かんない」
 不動産屋 「分からないことを分かつたとしても、分かることはすばらしいことです。ですが、それでも分からなかつたとしても、分かるうとしたことは無駄ではありません」
 客 「：今、私はどういう状態？」
 不動産屋 「：死にました」
 客 「何で死んだの？」
 不動産屋 「交通事故です。横断歩道を渡っている途中、信号無視をした乗用車にひかれま
 した。救急車で病院に運ばれ、懸命の救命措置が行われましたが、数時間後、
 息を引き取りました」
 客 「：」
 不動産屋 「信じられないと思います。信じなくても構いません。ですが、信じても信じな
 くて、そこに事実は存在します。感情とは無関係です」
 客 「：こういうときって、どんな顔したらいいのか分からない。どんな気持ちでい
 たらいいのか。怒ったらいいかかな。それとも泣いたらいいかかな。でも、そ
 んな気持ちにもなれない」
 不動産屋 「ここに来る人はだいたい、お客様と同じようなことを言います。同じような気
 持ちになります」
 客 「そうなんだ」

不動産屋

「私もそうでしたから」

客

「え？」

不動産屋

「おっと、私の話は関係ないですね。すみません。さて、そろそろお時間です」

不動産屋が立っている側の舞台袖から光がこぼれる。

不動産屋

「大丈夫ですよ。あちらの世界もそんなに悪くないです。敷金も礼金もありませんし」

客

「この世からは近いんですか？」

不動産屋

「遠いといえは遠いですし、近いといえは近いですね」

客

「どっちなんですか」

不動産屋

「あ、年に1回この世行きのバスが出ますので、それには絶対乗ってくださいね。バスは年に1回しかありませんから」

客

「分かりました。いや、まだ分かってないですけど、とりあえず、分かりました」

不動産屋

「ひとつだけ聞いてもいいですか？」

客

「どうぞ」

不動産屋

「何か心残りはありませんか？」

客

「多分、言い出したら止まらなくなる。心残りしかないですよ」

不動産屋

「では質問を変えます。一番最初に頭に浮かんだ心残りは何ですか？」

客

「：地区大会、出たかったなあ」

不動産屋

「地区大会？」

客

「私、高校で演劇部に入ってた、来週地区大会で私、役者として舞台に立つ予定

不動産屋

「だったんですよ」

不動産屋

「そうだったんですか」

客 「そうなんですよ。あーあ、みんなに迷惑かけちゃったなあ」

不動産屋 「それは、心残りですね。でも、お客様は悪くないですよ」

客 「だとしても、なんかね」

不動産屋 「そうですか」

客 「とりあえず、行きます。まだ何のこっちやって感じですけど、あっちでいろいろ整理します、頭の中」

不動産屋 「そうですね。お気をつけて」

客 「ありがとうございます」

不動産屋 「ありがとうございます」

客、不動産屋に向かって一礼。

不動産屋も一礼。

客、光の先へ。

光が消える。

不動産屋 「ありがとうございます」

不動産屋、机の資料を片付けながら：

不動産屋

「世界は私の心残りを置き去りにして、前へ前へと進んでいく。心残りが無い人はわざわざ「心残りはない」と口にはしない。口にはしないと、心残りが暴れだすよ。うな気がして、自分に言い聞かせるように「心残りはない、心残りはない」と唱える。自分に呪文をかけるように。今日も世界のどこかで誰かの心残りがひとつ、世界にこぼれて、溶けて、消えていく」

不動産屋、お茶を飲む。

「ぬるい」

暗転。

ア。パートさがし、おしまい。

明転。

とある高校の演劇部の部室。

ナカモリ

セリザワ

ナカモリ

セリザワ

ナカモリ

セリザワ

ナカモリ

セリザワ

ナカモリ

セリザワ

ナカモリ

セリザワ

ナカモリ

セリザワ

ナカモリ

セリザワ

（手を叩きながら）はい。お疲れー。

お疲れさまでした。どうでしたか？

とりあえずセリフは入ってるねちゃん。でも、ちょっとテンポがよくないかな。

前半のやりとりをもっとテンポよくやってみよう今度は。

そうですね。がんばります。

うん、私もがんばる。

でもやっぱり、誰かに見てもらったほうがいいですね、こういうのは。

そうなんだよね、こういうときに限って先生いないんだもん。でも仕方ないね。

あ、それとは別なんですけど、なんか、いろんな人に見られてたような気がしま

す。すみません、変なこと言っちゃって。

実は、私もそんな感じしてた。

先輩もですか？

うん。何でだろ、まあ、大会近いってこともあるのかな。

もしかしたらそうかもしれないですね。

とりあえず、片付けよっか。

そうですね。

幽霊部員

ナカモリ・セリザワ、小道具を片付けたり、机を元の位置に戻したり。
幽霊部員、その光景を見ながら：

私の心残りは何なのだろう。今は思い出すこともできない。世界が置き去りにする前に、私自身が私の心残りをどこかに置き忘れて、どこに置いたのかも忘れて、しまいには、何を忘れたのかすら忘れてしまった。私の心残りは何だったのだろう。なぜ私はここにいるのだろうか。私の問いに答えてくれる者は、どこにもいない。

幽霊部員、机が元の位置に戻されると、机に戻り、再び原稿用紙に向かう。
片づけが終わる。

ナカモリ

セリザワ

ナカモリ

セリザワ

ナカモリ

セリザワ

ナカモリ

セリザワ

ナカモリ

セリザワ

ナカモリ

セリザワ

さてと、これから何する？
何しましうね。また初めからやってみますか？
そうしたいところだけど、なんか疲れちゃった。
私も疲れました。なんか、いつもと違いますね今日は。何が違うのかうまく説明できないですけど。
私もそんな感じ。今日はこれで終わりにする？来週の初めにはウリノ先生帰ってくるから、もう一回通して見てもらおうか。
そうですね。やっぱり見てもらったほうがいいですもんね。
じゃあ、今日はこれでおしまいにしましょう。お疲れ様でした。
お疲れ様でした。
今日これから予定ある？もしよかったらファミレス行かない？
いいですよ。先輩がよかったら、ゲスト行きたいです。期間限定のパフェがおいしそうです。

ナカモリ
セリザワ

それ、私も食べてみたい。じゃあ、行ってみよう。
はい。

ナカモリ・セリザワ、部室を出る。
幽霊部員、客席に向かい：

幽霊部員

このあと二人は、横断歩道を横断中、信号無視の乗用車にひかれ、懸命の救命措置の甲斐なく、数時間後、息を引き取ることになる。死んだことに気づいていない二人は同じ時間ここにやってきては、迎えることのない「来週の地区大会」のために稽古を続けている。私は毎日その姿を、魂を見守る。明日も、あさつても、誰にも救われない心残りをただ、ひたすら、見守っている。

ナカモリ、部室に戻ってくる。
ナカモリ、見えない何かに向かい：

ナカモリ

いるんですよね、ここに。もしいるんだしたら、もう出てってくださいよ。

幽霊部員

私は彼女の報われない魂を見守り続けなければならぬ。

ナカモリ

いつまでここに居る気ですか。

幽霊部員

私は見守り続けなければならぬ。

ナカモリ

あなたがいるべき場所はどこではありません：先生。

幽霊部員、先生に。

先生
ナカモリ

ナカモリ、今度の大会の脚本がもうすぐ出来上がるんだ。
先生！

先生　ごめんな、いつもギリギリになっちゃって。

ナカモリ　来週地区大会があります。

先生　「アパートさがし」っていうタイトルにしようと思うんだ。

ナカモリ　先生の書きかけの脚本で出るんです。

先生　早くみんなに読んでもらいたいな。

ナカモリ　すみません、勝手に続きを書き足してしまいました。

先生　おもしろいって思ってもえたら嬉しいよ。

ナカモリ　どうしても先生の脚本で大会に出たかったです。

先生　明日には出来る。今回はちよつと自信があるんだ。

ナカモリ　先生の心残り、私たちが形にします。だから：

先生　今度の地区大会、楽しもうな。楽しんだもん勝ちだあいうのは。まあ、そもそ

も勝ち負けなんてないんだけどさ、楽しんだら、それだけで大勝利だよ。まあ、

それで県大会行けたら最高だけどな。とにかく、楽しもう。俺も楽しむ、だから、

ナカモリ　早くここから出て行け！

ナカモリ　原稿用紙が部室に散らばる。

先生　もう大丈夫です。新しい仲間もできました。とっても頼もしい後輩なんですよ。自分でちゃんと役作りしてきて、それがまたおもしろいです。ウリノ先生だって私たちのためにがんばってくれてます。いろいろ忙しくて疲れてるはずなのに時間作って私たちが練習一生懸命見てくれるんですよ。私、もう1人じゃありません。私、もう大丈夫です。だから、安心して、行くべき場所に行ってください。

先生、もう大丈夫です。新しい仲間もできました。とっても頼もしい後輩なんですよ。自分でちゃんと役作りしてきて、それがまたおもしろいです。ウリノ先生だって私たちのためにがんばってくれてます。いろいろ忙しくて疲れてるはずなのに時間作って私たちが練習一生懸命見てくれるんですよ。私、もう1人じゃありません。私、もう大丈夫です。だから、安心して、行くべき場所に行ってください。

先生
ナカモリ

：確かに、もう大丈夫のようだね。ナカモリ、よろしく頼む。さよなら。

先生、部室から出て行く。

ナカモリ

世界は私の心残りを置き去りにして、前へ前へと進んでいく。心残りがいない人はわざわざ「心残りはない」と口にはししない。口にしないと、心残りが暴れだすような気がして、自分に言い聞かせるように「心残りはない、心残りはない」と唱える。自分に呪文をかけるように。今日も世界のどこかで誰かの心残りがひとつ、世界にこぼれて、溶けて、消えていく。見えないものを見ようとすること、見えるものを見ないようにすること、どちらが難しいのだろうか。見えないものを見ようとして私は必死に目を凝らしたけれど、やっぱり何も見えなくて、いつも私の目の前には見たくもないものだけが見える。見ないようにすればするほど、その存在は大きくなる。見えないからといって、存在してはいないとは言いつれない。見えるからといって、存在しているとも、言い切れない。そんなことより、私は今、パフェが食べたい。今日の私なら、3つは食べられる……：食べないけど。

ナカモリ、部室から出て行く。
散らばった原稿用紙だけが残る。

先生

（声のみ）おーい：おーい、ナカモリー。聞こえるかー。聞こえたら一回戻ってこーい。

ナカモリ、戻ってくる。

ナカモリ

やっぱりいたんですね。これだけハッキリ先生の声聞こえたと、怖いとかそういうの全然ないですね。

先生

ごめんごめん、ひとつだけ言い忘れてた。

ナカモリ

何ですか？

先生

ナカモリ、お前の悪い癖だ。俺何回も言ったよな、帰るときはちゃんと部室片付けてから帰れって。

ナカモリ、散らばった原稿用紙を見て。

ナカモリ

あ。

先生

な？

ナカモリ

はい。

先生

何回も言わせるな。まあ、これが最後になるんだけどさ。

ナカモリ

すみません。最後の最後まで。

先生

まあいいよ。じゃあ、俺ほんどに行くから。行くべき場所ってところに。

ナカモリ

お気をつけて。

先生

ありがとう。さよなら。

ナカモリ

さよなら。

ナカモリ、原稿用紙を片付ける。

セリザワ、部室に戻ってくる。

セリザワ

先輩、遅いですよ……って何やってるんですか。

ナカモリ
セリザワ
ナカモリ
セリザワ

ごめん、ちよつと手伝つて。
何があつたんですか。
いろいろあつたのよ。いろいろ。
はあ。

2人で原稿用紙を片付ける。
片付けが終わる。

ナカモリ

ありがとうね、助かった。

セリザワ

どういたしまして。

ナカモリ

：セリザワちゃん！

セリザワ

あ、はい。

ナカモリ

地区大会、がんばろうね！私と、セリザワちゃんと、ウリノ先生と、3人で……

セリザワ

いや、4人で、うん、4人で、地区大会、がんばろうね！

ナカモリ

：4人つて、他に誰かいるんですか？

セリザワ

：この話の続きは、パフェでも食べながらゆつくり話そうよ。

ナカモリ

分かりました。あ、先輩。

セリザワ

何？

ナカモリ

私、パフェ3つ食べてもいいですか？

セリザワ

え？

ナカモリ

先輩、楽しくいきましようよ、楽しく。

セリザワ

楽しく……

ナカモリ

もつと笑ってくださいよ先輩。知ってます？パフェつて、笑いながら食べるから

セリザワ

甘いんです。笑いながら食べないと、次の日絶対お腹痛くなりますよ。

ナカモリ
セリザワ
ナカモリ
セリザワ

ナカモリ、笑みがこぼれる。

絶対痛くなるのはイヤだね。じゃあ、笑って食べなきゃね、パフエ。
そうです。じゃあ、行こっか。
はい。

2人、部室を出て行く。幕。